

國學院大學学術情報リポジトリ

公開講演会「観光と宗教」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001794

公開講演会「観光と宗教」

2010 年 12 月 11 日（土）に、國學院大學 学術メディアセンター 1 階の常磐松ホールにおいて、公開講演会「観光と宗教」が開催された。講師は、ツーリズム・マーケティング研究所主任研究員で、関西国際大学客員教授でもある井門隆夫氏であった。この講演会は科学研究補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（代表者・星野英紀大正大学教授）が主催で、國學院大學研究開発推進機構が共催して行われたものである。

同科研による研究は 7 つの研究グループが設けられているが、今回の講演会はそのうちの第 2 グループ（幹事・井上順孝）が中心になって企画されたものである。第 2 グループでは、宗教文化教育の教材についての研究・調査が中心的な課題の 1 つであったが、観光と宗教文化との深い関わりに着目して今回の公開講演会となった。観光の対象としては世界遺産が注目されることが多くなっているが、世界遺産にしても、その多くが宗教文化と深い関わりをもっていることが知られている。ただの物見遊山だけでなく、宗教文化を深く理解するための観光という視点も提起できる。すでに世界遺産と宗教に関するデータベースも作成中であったので、それに深く関わるテーマとして選ばれた。

講師の井門隆夫氏は、長年ツーリズム・マーケティングに携わってきた経験を有する。マーケティングであるから、顧客の獲得という経済的目的が第一に重要になるが、同時にツーリズムには文化的要素が大きく関わる。またこれは、旅は近代に始まったことではな

いので、それ以前からの歴史的展開も踏まえる必要がある。

井門講師の話は、江戸時代の旅の特質についての紹介から始まった。江戸時代、庶民は旅行を禁止されていたが、神仏への参拝の場合はその限りではなかった。参拝は旅の楽しみを伴うものであり、とりわけ「お伊勢参り」は庶民にとって一生の夢であった。また「丸金か京六か」と言われた讃岐の金毘羅大権現（今の金刀比羅宮）や、京都六条の東西本願寺への参拝も、同じく一大イベントであったことが紹介された。療養目的、遊興目的など、江戸時代の旅の目的について紹介した上で、それが現代にも続いていることを指摘した。そして巡礼が必然的に宿泊の需要を生んだことも述べられた。

これを踏まえて現代の旅において必要な要素が述べられた。それは、情報提供の充実、宿泊の魅力向上、体験交流メニューの充実、滞在を促進するイベントの実施、観光案内の充実、移動の快適化、歴史的建造物の改修・活用、観光案内所の整備といったものである。また、パワースポットなど、流行しているものを取り込むことも大事であるとされた。

ただ今日においては、観光事業の「大量販売モデル」から「付加価値モデル」への転換・誘導へと変わってきていることを述べた。つまり何か他にはないようなものが付け加わっていることの重要性である。宗教的な要素はここに大きく関連するということになろう。

そして宗教に関する観光のタイプとして、団参、祭り・イベント型、現世利益型、年中行事型などがあるとされた。こうした一般的

な説明に続いて、具体的な事例が紹介された。1つは千葉県勝浦市の「勝浦ビッグひなまつり」がどのようにして盛大なものになったかについてである。勝浦ビッグ雛祭りでは、かつて家庭で使われていた古い雛人形が1200体集められ、階段60段に並べられた。これを見に来た人は10日で34万人に達したという。

この試みで最初にターゲットにしたのは、嫁いだ娘をもつ60～70代の世代であったという。これらの人々に勝浦市の観光協会が広報し、かつて娘のために買ったのだが、今は死蔵されている雛人形を提供してもらうように呼びかけたのである。集まった雛人形が神社の階段に並べられた。この企画が雑誌・メディアに紹介されると、次の年にはさらに多くの雛人形が集まった。見物客も増えていった。こうして5年後には34万人の観光客が訪れるような一大イベントになったのである。そして、この企画を成り立たせたのは、雛供養という古くからの習俗に根差すものであったからだと説明された。

もう一つの興味深い事例は長野県のホテルで企画された「パパとママとスタッフで贈る温泉でクリスマス作戦！」というものである。これはスタッフと親が相談して、泊ったホテルでサンタに扮した従業員が、夜中に子どもを起こし、プレゼントを贈るというものであ

る。むろん、何を贈るかはあらかじめ親と相談しておく。クリスマスはキリスト教の習俗ではあるが、現代日本では一般的な年中行事に組み入れられている。そして多くの子どもはサンタが実在するかどうか、疑ったり、信じようとしたり、迷う時期がある。ほとんど宗教性は乏しいものの、もとは宗教的な性格をもったこの習俗を、幼児をもつような家族構成の人たちをターゲットにして行った企画である。

この講演は、現代の日本人がどのような場合に宗教的習俗に強く反応するかについて興味深い事例を提供するものであった。つまり、研究者が宗教的習俗と呼ぶものは、実は多くの人にとって宗教性は日ごろほとんど意識されない。しかし、こうしたイベントにおいては、そうした要素があった方が、人々の心をつかみやすいということである。

なお、この講演会の後、学術メディアセンター5階の06会議室で、ワークショップ「宗教文化教育の教材を探る」が開催されたが、講師の井門隆夫氏もこれに参加した。観光と、宗教文化との関わりを再認識するとともに、学生に宗教文化という問題を身近なものとして受け止めてもらい、関心を深めてもらうための具体的な方法についての討議がなされた。

(井上順孝)



井門隆夫氏